令和６年度　　学校評価総括表　　　　学校名　　　生駒市立鹿ノ台中学校

Ⅰ　学校教育目標	豊かな心と自ら学ぶ意欲をもち、主体的に活動する生徒の育成　～21世紀を生きぬく力の育成～　＜校訓＞創造・誠実・明朗 目指す学校像『一人ひとりが、生き生きと輝いている学校』（元気いっぱい　挨拶いっぱいの鹿ノ台中学校）

Ⅱ　前年度に残された課題	Ⅲ　本年度の目標	Ⅳ　来年度に残された課題
○生徒が輝く授業づくり 「主体的・対話的で深い学び」ならびに「個別最適な学びと協働的な学び」の推進、ICTを活用した授業づくり ○自治力と規範意識を培う 組織的・日常的な委員会活動の推進、生徒が自主的に行い達成感を味わえる学校行事の推進、生徒から信頼される生徒指導の構築 ○読書活動の推進 ○保護者・地域から信頼される学校づくり 学校運営協議会の運営、保護者や地域との連携、学校評価の活用 ○教職員の働き方改革の推進（いきいきと生徒と向き合うために） 自動採点システム等のICTを活用した業務の効率化、スクールサポートスタッフとの連携による業務のスリム化、定時退勤日の設定、部活動休業日の設定	①「個別最適な学びと協働的な学び」の充実 ②ICTを活用した授業づくり（主体的な学びの実現に向けた授業研究の推進） ③生徒の自尊感情の醸成 ④読書活動の推進 ⑤保護者・地域から信頼される学校づくり	・生徒が輝く授業づくり 基礎・基本の確実な定着を目指した　「主体的・対話的で深い学び」ならびに「個別最適な学びと協働的な学び」の充実・ICTを活用した授業づくり ・自治力と規範意識を培う 組織的・日常的な委員会活動の推進・生徒が自主的に行い達成感を味わえる学校行事の推進・生徒から信頼される生徒指導の構築 ・読書活動の推進 ・保護者・地域から信頼される学校づくり 学校運営協議会の運営・保護者や地域との連携・学校評価の活用 ・教職員の働き方改革の推進 ICTを活用した業務の効率化、定時退勤日の設定、部活動休業日の設定

[1]（重点課題番号）評価項目	[2]具体的達成目標と評価指標	[3]外部アンケートの分析		評定	[4]自己評価		[5]学校関係者評価
	具体的に、何を、いつまでに、どの水準まで、数値化	児童生徒アンケート	保護者アンケート		最終評価（成果と課題）	課題の改善策等	評価者人数
		実施日　2月10日	実施日　2月10日		評価日　2月18日		評価日　2月27日
	公表日　4月20日	公表日　3月10日	公表日　3月10日		公表日　3月10日		公表日　3月10日
	公表方法 ☑ ホームページ ☐ 文書配布 ☐ 説明会実施 ☐ その他	公表方法 ☑ ホームページ ☐ 文書配布 ☐ 説明会実施 ☐ その他	公表方法 ☑ ホームページ ☐ 文書配布 ☐ 説明会実施 ☐ その他		公表方法	☑ ホームページ ☐ 文書配布 ☐ 説明会実施 ☐ その他	公表方法 ☑ ホームページ ☐ 文書配布 ☐ 説明会実施 ☐ その他
①	・校内研修において「主体的・対話的で深い学び」ならびに「個別最適な学びと協働的な学び」についての理解を深め、授業公開・互見授業を行い、授業力の更なる向上を図る。 ・学習活動の中で、個々に補充的・発展的な学習に取り組んだり、ペア学習・班別活動・コミュニケーション能力を高める言語活動の場面を多く設定する。 ・ICT を活用しながら、自分の意見を発表したり、学級から学年へと意見を出し合ったりして、多様な意見や考えの共有・合意形成の場を広げる。	・「鹿ノ台中学校の授業はわかりやすく楽しく学習できる」は、80.3%（+4.2） ・「話し合い活動や意見を発表する授業、場面がある」は、83.5%（+4.5） ・「授業や発表活動に積極的に取り組めた」は、83.5%（+2.6） と、3項目ともに概ね肯定的な回答であった。 ※（　）内は前年比	・「生徒は、授業がわかりやすいと言っている」は、61.6%（+6.6）であった。 ・「教職員は生徒の人間関係に配慮して、より良い学級づくりに努めている」は、88.2%（+4.2）、「教職員は生徒への声かけ等を通じて関係づくりに努めている」は91.8%（+6.6）と、高い水準で評価されている。	A	・道徳、総合、学活を含め、生徒の活動を大切にした授業が展開されていると思われるが、いっそうわかりやすく深い学びとなるように授業力を高めたい。 ・「協働的な学び」の質を高めるために、まずは生徒との信頼関係に基づく授業環境づくりは重要である。生徒に対する指導者のきめ細かな配慮は大変有効であると思われるので、今後も意識していきたい。 ・保護者アンケート「学校は、学習の達成度をわかりやすく示している」では、肯定的な回答は、82.5%であり。昨年度を20ポイント以上上回った。公立高校入試制度における調査書取り扱いの変更に伴い、丁寧な説明を意識したことが反映したと考える。	・「コミュニケーション能力を高める活動」を各教科で意識的に行った。「協働的な学習」はもちろん、「個別最適な学習」についても個々の生徒の実態を踏まえ、ICTを活用した学びの充実に向けて授業力を高めたい。 ・保護者アンケート「学校は、学習の達成度をわかりやすく示している」で、肯定的な回答をいただいた。今後、令和8年度以降の公立高校入試における第三観点の調査書での取り扱いについて、保護者・生徒に一層十分な説明を行うとともに、県教委より示された「令和8年度　入学者選抜の方向性」を教員が熟知することが必要である。	・公立高校の入試制度の新体制に向けた第3観点の評価の在り方について、さらに精査が必要であると想う。決してテストの点数だけが評価の内容ではなく、日常の学習活動の様子や成果も含めた評価であることを生徒も保護者も理解できるよう、丁寧な対応を継続していただきたい。　・これからの時代を生き抜くために必要な力として、正解を追究するのではなく、最適解を見出し解決につなげることができるような学習活動の展開を、今後もお願いしたい。
②	・教員各自がICTの活用を含めた「令和の日本型学校教育」についての理解と認識を深め、研究授業・授業公開を行い、授業力の更なる向上を図る。 ・全教員が、2学期に授業公開を行う。 ・ICT教育の推進のため、エバンジェリストの企画による校内職員研修を行うとともに、県内及び市内の各種研修会への参加を促す。	生徒のタブレット操作については、ほぼ定着しており、教員の活用についてもスキルアップが認められる。教員の具体的な活用例としては、デジタル教科書・パワーポイントの活用、実験・観察記録等でのロイロノートの活用、作文・推敲の作業でのタブレットの活用、宿題や課題についての共有・解答・解説、情報収集・写真や動画での資料提示、プレゼンのためスライド編集などがある。表現活動・意見交換・情報処理等にバランスよく活用されている。		B	・ICTの活用について、市内教科部会等への参加により、各教科、総合・学活においても教員のICT活用のスキルアップにつながった。 ・校内での授業公開の実施について、今年度は、2学期に教科ごとの研究授業を全員で行い、研究協議において意見を出し合い、専門性のあるスキルアップのための改善点等を共有することができた。 ・採点ソフトの導入により、多くの教員が採点業務の時間短縮と利便性を実感することができた。	・校内、校外のICTに関する研修への参加により、授業中の表現活動・意見交換や課題の提出等におけるタブレットの活用の機会は増えたと思われる。教科ごとに有効な活用の仕方にも特徴があるので、他校とも情報交換しながら授業力向上につなげたい。 ・教科ごとに実施した校内の授業研究は、専門性を加味しながら分析する点で有効であるが、他の教科での工夫も参考となる点が多いので、教科横断的な研修の場を設定しながら工夫今後も継続したい。	・中学校での授業改革は、教科の特性・進路保障等において難しい点を含んでいると思うが、生徒がAI等に依存することなく、生きる力・持続可能な社会を形成できる力の育成をお願いしたい。。
③	・生徒が周囲から評価され、認められる活動の場を増やす。 ・生徒会担当教員の定期的な打合せの時間を確保し、学校行事や委員会活動において、生徒の意見や考えを取り入れた内容を考案する。 ・年間3回の二者面談を行い、共感と信頼に基づく「支える生徒指導」の構築に努める。 ・毎週の生徒指導部会・月ごとの職員会議等での生徒に関する情報共有を徹底する。 ・生徒の自己有用感を高揚させる具体的な指標として、生徒アンケートの「自分には良いところがある」という設問に対する否定的な回答を10%以下にするとともに、「みんなでがんばることを通じて達成感があった」という設問に対する肯定的な回答を90パーセント以上にする。	・「自分には良いところがある。または、自信を持っていることがある」は全体で75.0%で、目標の指標へはあと一歩であるが、昨年度並みの状態を維持している。3年生については、81.0%で、2年前の1年生時63.5%、1年前の2年生時65.7%と比べ15ポイント近く高くなっている。昨年度よりコロナによる制約が緩和されたこともあり、できることを精一杯やり切り、達成感を持てたことが数字の変化に現れている。学年が上がるにつれて高くなってきており、取組の成果は出ていると考えられる。 ・「みんなでがんばることを通じて達成感があった」は91.4%（+1.5）と、昨年度同様に目標の指標に達することができた。 ・「生徒会活動や委員会活動・係活動に積極的に参加した」は、88．8%（+1.7） ・「人の気持ちを理解しようとしている」は、94.7%と、昨年度に続き、高水準を維持している。	・「生徒は、楽しく、安心して学校生活を送っている」は、88.7%（+2.6） ・「生徒は、学校行事に熱心に取り組んでいる」は、89.7%（+2.6） ・「生徒は部活動に熱心に取り組んでいる」は、81.1% ・「学校は生徒会活動や委員会活動が活発である」は72.8%（+11.6）と、前年を10ポイント以上上回った。 コロナ禍前の形式にこだわらず、新たな工夫を加えながら行事等を実施したことを高く評価されている。	B	・学習活動や委員会活動、学校行事、部活動等、あらゆる場面で各自の活躍できる場を設定するなど、自己有用感の高揚を意識した取組を進めている。その際、安心して自己表現ができる雰囲気作りにも配慮した。保護者や地域の方が参観される場もあったので、生徒のやる気も一層高まっていったと思われる。 ・体育大会での応援合戦や文化祭での有志発表は、大いに盛り上がった。体育大会の応援合戦は学級ごとに取り組み、生徒の企画・立案を基本とした。文化祭での有志発表は、多くの参加があり、どの発表も観覧者の心に深く響くものであった。学年・教科・文化部の展示も、生徒の達成感を高めるために、随所に工夫を凝らし、大変丁寧に準備されたものであった。 ・「みんなでがんばることを通じて達成感があった。」（91.4%）では、他者とのかかわりを通した学校行事、生徒会・委員会活動等を通じて、満足感・一体感を味わった生徒が多い。学年が上がるにつれて、他者とのかかわりを通して成長している様子がアンケート結果からもうかがえる。	・「人の気持ちを理解しようと努力している」は94.7%と、集団活動に不可欠な「他者理解」を心掛けながら行動している生徒がほとんどである。道徳科等でも、この視点からより質の高い指導を積み上げながら、生徒がお互いに安心して対話ができる関係の構築に努めたい。 ・「みんなで頑張ることを通じて達成感があった」「自分にはよいところがある。または、自信を持っていることがある。」に対して否定的な回答の生徒には、二者面談等で本人の気持ちに寄り添い、教育相談部・生徒指導部・外部機関と連携し、チームとして支援していく必要がある。 ・「学校生活について相談できる先生がいる」は、70%（+3.6）と、概ね肯定的であるが、生徒が担任・担当の教員以外にも安心して相談できる関係づくりをめざしたい。	・行事等の参観をさせてもらったり、運営協議会において学校からの報告をきかせてもらったりする中で、教員の様々な工夫と配慮に支えられながら、多くの生徒が充実した学校生活を送っていることが理解できる。 ・不登校支援について、その方法が様々あると聞いている。校内だけでなく、校外の関係機関とも連携を密に保ちながら、保護者も含めて安心できる「こどもの居場所づくり」を充実させていただきたい。 ・体育館の空調が整備されると聞いている。暑さが厳しい時期であっても、体育館が教育活動の場所として有効に活用できれば、生徒がもつ達成感もさらに高まるのではないかと思う。　　・先生方の心身の健康こそが、生徒を元気づけたり勇気づけたりする源である。「働き方」の改善に引き続き留意いただきたい。
④	・朝読書とビブリオバトルの取組をいっそう推進する。 ・生駒お話しの会、鹿ノ台ふれあいホール図書室と連携し、「読み聞かせ」により生徒の感性を豊かに育むとともに、生徒自身がそのスキルを身に付け、3年生の保育実習や鹿ノ台小学校の放課後子ども教室等で披露するなどして、地域との交流の場において役立てる。 ・保護者、地域への本校図書館開放の場として、夏季休業中に「大人のためのブックトーク」を開催する。	・読書時間やビブリオバトルの取り組みを中心とした読書活動の推進は62.7%（+11.5）と昨年度を12ポイント近くアップした。ブックトークの取り組みの継続と共に、昨年度より始めた毎週水曜日の「朝の読み聞かせ」、2学期の校内ビブリオバトル大会（R6市長杯ビブリオバトルにて2年生生徒がチャンプ獲得）の実施等、学校の教育活動における読書活動を全校体制で行った。		A	・本年度も夏休み中に鹿ノ台ふれあいホール図書室のご協力のもと、「大人のための読み聞かせ・ブックトーク」を企画し、本校の図書室を開放して地域の方の参加により実施することができた。 ・年間を通して、地域ボランティアの方7名と鹿ノ台ふれあいホール図書室の司書2名のご協力により、毎週水曜日に朝の読み聞かせを実施することができた。 ・生徒は、文化祭での読み聞かせ発表やビブリオバトル市長杯への出場をめざし、その都度熱心に取り組むことができていた。朝の読書時間に地域ボランティアの「読み聞かせ」を取り入れたことで、小学校時代の読み聞かせを思い出したり、絵本のテーマを考えながら聞いたりするなど、短い10分間ではあるが、生徒の精神面や情緒の面でも有効であったと思われる。 ・本校生徒が鹿ノ台小学校の放課後子ども教室へ出向き、児童に絵本を読み聞かせする機会を設けることができた。	・地域の方が学校の教育活動に参加いただける機会として「読み聞かせ」が定着してきている。生徒が、「読み聞かせてもらう立場」から「読み聞かせる立場」へ移行する機会として、放課後子ども教室への生徒の派遣等の取組も実現することができたので、今後は、定期的・計画的に実施していきたい。 ・日々の読書活動への意欲を高めるために、学校図書館の活用について、他校の取組も参考にしながら、学校司書・図書委員会担当とともにさらに工夫の手立てを考えていきたい。	・「ビブリオバトル」等の全校体制での読書活動の推進は、全教員の協力なくては成り立たないと思う。校内にとどまらず、小中学校間で、あるいは学校図書館・近隣の図書館同士の連携も重なることで、少しずつ取組の成果が表れてきていると感じる。 ・生徒だけでなく、保護者や地域住民が読書に親しめる場所づくりとしての「学校開放」の機会を今後も設けていただきたい。
⑤	・学習活動（道徳・読書活動・教科での実習等）における地域人材の活用。 ・職場体験学習や保育実習等の体験学習、小中特別支援学級の交流、放課後子ども教室への生徒のサポート等、地域の保幼小との連携。 ・鹿ノ台納涼祭、オータムフェスタ等の地域行事への参加。 ・避難所施設として、春、秋の地域防災訓練への支援体制作り。 ・月一回の学校だより、随時のX等による保護者・地域への情報発信。	・助産師による「いのちを考える」講演会、校区青少年指導委員会との共催による講演会「元Jリーガーによる夢や目標を達成するためのヒント」や、1年生での「認知症のケア」についての講演会におけるそれぞれの実施後の感想、あるいは3年生「校区内の保幼園での保育実習」の感謝の手紙には、校内での学習だけでは学べない「命の大切さ」、「人とのつながりの大切さ」、そして「他者理解の大切さ」を実感し、自分の身近な生活や将来の生き方に役立てようとする姿勢が表れていた。	「学校は保護者や地域と連携して教育を進めようとしている」は、76.4%（+8.4）、「学校・学年は、保護者に教育方針や学校の様子を通信やHP、X（旧Twitter）などでわかりやすく伝えている」も75.4%（+8.4）と、昨年度を上回り、保護者・地域と連携した教育活動・広報活動・防災活動を踏まえ、概ね肯定的な評価であった。	A	・5年ぶりに職場体験として、校区内外、近隣22か所の事業所にご協力いただき、2年生が2日間。お世話になった。 ・地域ボランティアの方と整備委員の協力による緑化運動を進め、春と秋に花壇の花植えを行った。 ・校区内の「認知症カフェ」のボランティアスタッフにより、「認知症のケア」について生徒向けの講演会を開催した。 ・近隣の3つの保幼園と連携し、3年生の「保育実習」を実施した。 ・鹿ノ台納涼祭、オータムフェスタの地域イベントで吹奏楽部が演奏を披露することができた。 ・青少年指導委員会共催の講演会「元Jリーガーによる夢や目標を達成するためのヒント」を実施した。 ・地域ボランティアによる「朝の読み聞かせ」を各クラス9回ずつ延べ54回実施した。 ・家庭科の実習補助としてボランティアの方に協力いただいた。 ・「校長室だより」「学年だより」の発行、また、学校・学年行事の様子を伝えるXにより、学校の教育方針や教員の思い、生徒の活躍の様子を発信するよう努めた。 ・自治連合会主催の防災訓練を春と秋の2回にわたり、本校にて実施した。	・コロナ禍に中断していた活動が再開できた今年度であった。職場体験学習の実施は、「キャリア教育」を展開しながら地域の方と直接関わることのできる貴重な場面なので、、丁寧に練り直したうえで、より質の高い体験の場としていきたい。 ・校内の花植え、門松・しめ飾りの設置等、地域の方々の心遣いに支えられ、季節ごとの花々が生徒の心に安らぎを与えている。 ・「認知症」は、高齢者が多い校区に住む者として向き合うべき課題である。今回は1年生向けに行ったので、今後もしっかりと時間の確保をしながら教育的効果を高めたい。 ・「保育実習」は12月に感染症の状況を見極めながら実施することができた。運動会の練習のために園児が中学校の運動場を使用することもあり、交流の場が増えつつある。　・学校からの情報発信には、自分たちの頑張りが披露されることについて、生徒が反応する声も聞こえてきている。自尊感情を高める手立てとしても、継続していきたい。	・地域人材による外部講師の講話、教科指導への補助、読書活動への協力等が軌道に乗ってきている。また、生徒が地域へ出向いてつながりを深めるという意味で、「職場体験」は大変意義深いものがある。 ・学校理解を深めるための「学校運営協議会」の位置付けが重要である。小中合同での組織づくりができるメリットを十分に生かしながら、9年間を見通しながら教育活動の質を高めることについて、支援を続けていきたい。 ・防災への中学生の力量を求める声が地域にはある。まずは自助の確立があった上での共助である。校内での避難訓練はもとより、地域の防災訓練に参加することで、防災意識をよりしっかりと持たせるができると考える。